資料 22.1958 年 7 月 15 日「岩稜会員に告ぐ」岩稜会会長石岡繁雄著

文献 27) 『岩稜会員に告ぐ』岩稜会会長石岡繁雄 浄書 p45,49,51,70

p49

私は、会の責任者として以下のことを述べる義務を感じる。10 年以上の経歴を有する当会会員諸君に、こういうわかりきったことを今にいたって述べなくてはならないことは誠に残念であるが、それかといって絶対に放置出来ない問題である。

(イ) 当会では現在以上に大きな危機と見られる時代が過去に 1 回あった。それはあの屏風岩登攀に大きな功績を立て、且つ当時会の運営の柱となっていた本田善郎君を除名した時である。従ってその当時の会員は、これから述べることはよくわかっているわけであるが、その後新しい会員が増加し、こういう登山のモラルについて勉強不足となり、それにあまりにも平穩にすぎたため、この基礎的なことをうっかりしている者が出来、そのために今回の問題が発生したと考えられる。ここに、この大切な点を明らかにするとともに誤って考えていた者は、即刻正常にもどってもらいたい（なお、本田君については、当時の私の決定をよく了解され、1 年前再び会に復帰され目下大いに活躍中であることは諸君御承知のことである）。

考えてみるとこういう危機はどここの山岳部にもある。その乗り越え方によってそのクラブが立派に成長するかどうかがきまる。換言すれば、会が立派になるかどうかは、こういう問題がおきたとき責任者である者がその解消のためどれだけ努力をするか、そして会員がそれにどういう反応を示すかによってきまるのである。ふりかえてみるのに私はこういう手紙をこれまでに何回もかいてきた。その度に諸君は私の気持ちを了とし危機をうまく乗り越し、今日の岩稜会をきずいたと信ずるのである。今回ももとよりうまく乗り越えられると思っている。もしそうでなければいまでもなく岩稜会は解消されるべきである。この問題は人間の生命に直接かかわるからである。

(ロ) 岩稜会は、いわゆる実業団山岳部である。山を登り山を研究することによって、お互いの親しみを増し、お互いに楽しみ合う会である。又、それによって登山界と社会に何らかの貢献をする会である。

楽しみは一般のスポーツと同じで困難な目標が達せられたときほど大きいので、我々が困難な目標を目的にすることは当然である。しかし困難な目標はそれだけの力なくしては達せられない。同時に、困難な登山ほど危険がとれないやすい。遭難が発生したのでは楽しみはない。それどころか、学校山岳部と異なって実業団の場合は、社会の圧迫のため消滅のうき目をみる。即ち、危険防止は何にもかえられない大切な点である。危険を冒すくらいならば登山をやめた方がよい。危険防止の

ための第一のものはチームワークである。人の和である。少なくとも、お互いにわだかまりがあることをみとめながら、漫然と困難な目標にあたることは許されない。チームワークの万全でないことを意識しつつ先人がなしえなかった危険に立ち向かうことは罪悪である。

チームワークとは指導者（リーダー）を中心として打って一丸となることである。それ以外にない。個人個人に当初は不平があっても、会の目標が決定したからには、喜んで協力することが必要である。これが出来ないで会に非協力を表明し別行動を宣伝し、他の会員をそのために説得するような会員は会員の資格はない。すべからず会を退いてその者の好む会に赴くべきである。

「会の目標はこうだが俺は賛成しないから別のことをする」というのではチームワークは成り立たない。計画が失敗するばかりでなく遭難の発生の可能性が大いに増大する。「俺はボッカなんかやりたくない。アタックがやりたい。アタックメンバーに入れてくれなければ別のところを俺だけで登る」というのが幼稚な山岳部ではよくあることである。実際万人に向く計画などというものはない。ヒマラヤ計画にしても隊員以外の者は長い間山へも行けずにつつと辛い仕事に従事しなければならない。このことは確かに不服であろう。しかし、その不平をこらえて協調出来るかどうかはその会員が出来ているかどうかを示すものである。又、そういう不平を許すような会ではヒマラヤの資格は全くない。以上要するに、チームワークに欠点のある会は、困難な目標を選ぶ資格がないことを述べた。

(八) その他、会の運営について諸君が知っておかねばならぬことがある。

① 我々の会は学校山岳部と異なり、実業団であるので社会的事情を考慮し、これに対応しなくては、結局、会員はその圧迫を受けて会は滅亡してしまう。10年前屏風岩登攀のときでも我々は鈴鹿市、三重県の一般人のサービスのために多くの時間をさいていたのである。今回でも社長が三重県観光課に協力するために大きな犠牲をはらったり、金城山岳部や（須賀顧問直接の依頼による）名大関係者にサービスすることも上記の意味からも大切であり、とくにヒマラヤ計画を少しでも有利にするためには、絶対必要なのである。それもわずかなサービスである。同様に現在、各地の高等学校で教鞭をとっている5名の会員諸君がその学校のために山を通じてサービスしていることは、会の方針にも全く一致することである。会のこの方針に対し反対を主張しつづけることは危険な認識不足であり、絶対に許されないことを承知すべきである。

② 会の目的が定まったならば、その達成をまって次の大きな目標に移ることが、仕事を立派にやるためにも危険防止のためにも是非必要である。「二兎を追うもの一兎をえず」のたとえがあるが、このことは登山には特に大切である。又 次の大目標を定めるときには、まず計画の当初において、

リーダーとか、本会においては、幹事会にはかってよく検討の上、リーダーの決定によって行うのが当然であって、今回のように一人の者が考え、それを一部の者に話し、リーダーに知らせることなくその準備をし、既成事実にしてしまうやりかたは、全くいけない。この前例はチームワーク破壊のもとであり、もとより危険なことである。誰もかれもそういうことをしたならばどうということになるか、考えてみるまでもないことであり、今後二度とくりかえされてはいけないことである。

(二)以上のことは単に技術があるという長所のためすべてに優れているかの如きうぬぼれによっておきることが多い。このうぬぼれが人間を無反省にする。登山は技術だけではない。人の生命をあずかるのである。3年や4年の経験では不十分である。又、技術がうまいということは、他の人間との比較でいえることである。従って、人間の登ったルートならばいつも登れる。だから俺は無敵だとウヌボれるようになる。人が登ったことのないルートでは登れるかどうかはまるでわからない。そういう時にこのうぬぼれは大いに危険である。こういう者を困難な登攀のリーダーとするときは遭難の可能性がある。今までの登山史がそれを示している。たとえば、自分が登れなくなるとこのうぬぼれが急に破れるため理性の判断を欠き自分でも登れないというその困難な場所へ力のない新人をまんげんとトップに立てるといような決定を行うことになるのである。リーダーは、技術よりも経験があり、メンバーの意見を虚心にきく、正常な理性を失うことなく、人の和を主とし、安全を旨とするものでなくてはならない。ましてや今回述べているようなことで認識不足をおかしているうちはとうていその資格はない。

又、リーダーは困難な場面に立ちいたって進むか退くかを考えるとき、会員の中で安全な方を主張する者があれば、自分は登るべしと思っても安全な方の主張に従って決定を下した方がよい。万一自分の判断にあやまりがあるとも知れないからであり、もしあやまれば死であるが、一方、安全な判断に従っておけば誤っていても登れなかったということだけですむからである。

また次の機会をねらえばよい。たとえば、次の目標を右岩稜にしたような場合、登攀のリーダーとなる者は、この点とくに留意しなくてはならない。要するにリーダーは、自分は人間である以上、自分の判断は必ずしも正しいとはいえないこと、又かならず遭難してはいけないことを常に考えていなくてはならないのである。 p49-51 p69,70

(ホ) さて、今年の計画で、私は『穂高の岩場』下巻のための山での最後の仕事、約3,4日分を完成の後(雨ならばもとより順延)、つまり『穂高の岩場』という朋文堂の社長の依頼によって始まったこの大きな目標完遂の後に、右岩稜という次の目標に進むという決定を行った。あらゆる事

情から判断して、それが妥当と考えたからである。『穂高の岩場』の仕事に対してはチームワーク不足でもさして危険の心配はないが、次の目標である右岩稜は古来悪絶をもってうたわれた未登の岩壁で、甚だ困難かつ危険な場所である。これを会の目標にするからには会のチームワークには一点のくもりがあることも許されない。しかも現状では会のチームワークは全く不十分である。従って私は、今しばらく会の様子を見てそれでなおチームワークが改善されなければ、私は右岩稜という次の目標に移ることを禁止しなければならないと考える。右の判断並びにこれにもとづく計画の変更については、7月25日までに全会員に通知する（現在としては、一応従来の線にそって準備をつづけられたい）。どのような決定にしろ会の総意の上でその権利を与えられている私の決定に対し、不満のある者は直ちに会から去ってもらう。このことは会の責任者として又もし遭難がおきればどのようなことになるかわからない鈴鹿に住む社長や私の立場としてその責任上当然の決定である。山の問題のうちでもとくに危険防止に関しては、齒に衣をかぶせて討論されてはいけない。徹底的でなくてははいけないし、不安を感じたならば遅延は許されない。私は全会員が気持ちよく率直にこのぶしつけな警告を受け入れ反省すべきは反省して、立派なチームワークをもって、会の向上に一致して努力してくれることを信じて疑わない。

なおそれについて山と溪谷社の近刊『登山講座』第1巻早大山岳部の杉本氏の「リーダーシップとメンバーシップ」の中から左記（下記）を引用した。さすがに長い伝統をもつ早大である。この大切な問題について少しのあやまりもない。

- ① 重要な決断を下す際、隊員の意見を聞くことは良いが隊全部の行動を多数決で決定する如きは、絶対に避くべきである。
- ② 計画の実施にあたって一番大切なことは、リーダーは全計画の実施状況をその時々において正確に掌握しなければならないし、メンバーは各自の任務を知悉（ちしつ）して良くリーダー指揮下に入らなければならない。
- ③ 登山において大切なことは、ある程度の教養と登山技術を基礎とした経験であるが、誰がこの点にすぐれているかと判定することはなかなか困難であって、ここに他のスポーツと異なる点がある。同一山岳団体に所属して多年の間には水が低きに流れるが如く自然に決定されてゆく。この間の事情を説明する例は、マナスル遠征における槇隊長の例であって、他のスポーツでは60才前後の隊長、指導者は想像も出来ないであろうが登山の世界では立派な成果があげられる。
- ④ パーティーにある程度経験があるメンバーがあった場合とか、大学山岳部員でいえば2年部員位で生意気盛りのメンバーがいる場合には、リーダーの指令が虚心坦懐に受け入れられぬことがある。しかし、若干の遅延や論争が隊に致命的な結果を招来することさえあるのだから、リーダ

ーは自分の経験能力に自信をもって、またメンバーの意見を取捨して敏速果敢に判断を下さねばならない。そして、又リーダーは一たん指示した後はメンバーに反対意見や不平を許してはいけないし、メンバーもその指示に服すべきである。

⑤ 隊の協調とはチームワークである。登山以外の団体スポーツではチームワークがとれなくても試合に負けるだけであるが、登山では生命の問題である。登山においてはあらゆる面のチームワークが必要である。優れた大学山岳部やクラブ山岳部で良くチームワークがとれているのは、チームワークを重視して不適格な者を部から淘汰しているからである。

⑥ いずれにしても各メンバーの注意の焦点、チームワークの焦点をリーダーに集めて、リーダーが協調の中心になることが必要である。

⑦ チームワークに不安のあるときは、高度の登山を行ってはならない。

⑧ メンバーとしての心得は、リーダーの立場を理解し指令に服するためにも、リーダーシップを勉強すべきである。又パーティーの方針が決まっていないときにリーダーに意見を申し出るのは少しも差し支えないが、一度リーダーの意志が決定し指令がだされた時は、喜んで服従するようでなくてはならない。ブツブツ不平を言ったりしてパーティーの気分をこわし、チームワークをくずすことは一番いけないことであって、スポーツマンらしくあっさり服従すべきである。

⑨ メンバーがあってリーダーがある以上完全な自由はないのであって、オーケストラに指揮者がある如く共通目的に向かって各メンバーの意思を統制する必要がある。

⑩ リーダーにも過失がないとは限らない。しかし、リーダーの過失はおそらく注意を払いすぎた結果であって、不成功の場合にもリーダーの行為が正しかったと認めることはパーティーにとって少なくとも安全であると同時に、不服や不賛成を表してリーダーを非とすることはパーティーの調和と活動力を破壊するものである。

岩稜会員に告ぐ

岩稜会会長 石岡繁雄

私は会の責任者として以下のことを述べる義務を感じる。十年以上の経歴を有する当会会員諸君に、こういふわが
りきったことを今にいたって述べなくてはならないことは誠に残念であるが、それかといつて絶対に放置出来まい
問題である。

(4) 当会では現在以上に大きな危機と見られる時代が過去に一回あった。それはあの屏尺岩登攀に大きな功績を立
て、且つ當時公の寵愛の柱と居つていた平田徳太郎君を際名した時である。従つてその当時の会員は、これから述
べることはよくわかつているわけであるが、その後新しい会員が増加し、こういふ登山のモラルについて勉強不
足となり、それにあまりにも平穩にすぎたため、この基礎的なことをどうつかりしてゐる者が出来、そのため
に今回の問題が発生したと考へられる。ここに、この大切な点を明らかにするとともに誤つて考へてゐた者は、
速刻正帰にも違つてもうけたい。へん部、本田君については、当時の私の決定をよく了解され、一年前再び会に
復帰され目下大いに活躍中であることは諸君承知のことである。

考へてみるとこういふ危機はこの山岳部にもある。その糸リ惑え方によつてそのクラフが立派に成長するが
どつかがさまる。模倣すれば、会が立派になるかどうかは、こういふ問題がおきたとき責任者である者がその解
答のためだけだけ努力をするか、そして会員がそれにどういふ反応を示すかによつてさまるのである。ふりかえ
つてみるに私はこういふ手段をこれまで何回もかりてきた。その度に諸君は私の気持を了とし危機をうまく乗
り越し、今日の岩稜会をきづいたと信するのである。今回ももとよりうまくのりこえられると思つてゐる。もし
どうぞなればはいうまでもなく岩稜会は解消されるべきである。この問題は人間の生命に直結かわるからである。
(ロ) 岩稜会は、いわゆる実業団山岳部である。山に登り山を研究することによつて、お互の親しみを増し、お互に
榮しみ合う会である。又、それによつて登山界と社会に何らかの貢献をする会である。

榮しみは一級のスポートと同じで困難な目標が達成されたときほど大きいので、我々が困難な目標を目的にす
ることは当然である。しかし困難な目標はそれだけの方なくしては達せられぬ。同時に、困難な登山ほど危険
がともないやすい。困難が発生したのでは榮しみはない。それどころか、学校山岳部と異つて実業団の場合は、
社会の圧迫のため消滅のうき目である。即ち、危険防止は何にもかえられない大切な点である。危険を冒すくら
いならば登山をやめた方がよい。危険防止のための唯一のものはいふまでもなく、少なくて

「ナイロンザル事件」も「穂高の岩場」も実に長い試練であった。いやに
なるのも無理はない。これは先のときの苦しさも物語る一コマである。